〔翻訳〕

ジョン・ヘンリー・ニューマン「宗教との関係からみた知識」

田　中　秀　人　訳

1

皆さん、本日私たちは三回前の「講演」で始めた考察にけりをつけることになると思いますが、他に何の理由がなくともその長さ故に、それが寛大な聴衆の皆様にさえも忍耐を要求したことを、私は十分承知しています。

先ず第一に、私は「知識」がそれ自体の報酬であるという原理を確立することに専心し、この見地に立って考えた場合、それが「人文(リベラル)・教養知識」と呼ばれ、諸々の「学術機関」の目的となることを明らかにしてきました。

次に、「知識」がそれ自体のために追求されるという場合、「知識」という言葉によって何が意味されるのかということを検討し、この理念を申し分なく実現するためには「哲学」がその**雛形**とならねばならないということ、言い換えれば、知識の内容を習得された知識としてただ受動的に精神に取り込むのではなく、互いに関係し合い、全体の統一性の中で互いに解釈し合う諸部分から成る一つの体系として習得し、専有すべきことを明らかにしました。

さらに、このように「知識」の領域を一つの統一体として哲学的に省察することが、「知識」の個々の諸部門を理解し，それぞれを正しく認識することにつながり(事実そうなりました)、その結果、適切にも啓発と呼ばれるようになるということを明らかにしました。それはまた、ものごとをあたかも空間におけるかのように、一つ一つ明確に位置付けることなので、それを精神の拡大と呼んでもよかろうということを示しました。その上さらに、それこそが本来の精神の陶冶であり、その最良の状態であることを示しました。何故なら、一つには、それが知性にものごとをあるがままに見極める力を、あるいは空想、評判、理論に対して真実を見極める力を保障するからであり、一つには、「知識」の哲学的省察は知性が有する様々な力の完成を前提とし、そのことを必然的に意味するからです。

以上が、たとえ隠れた利益など何もなくとも、それ自体のために追求されるに足る「知識」だと

私は申しました。ですが、ここまで話が及んだ時、私はいま一歩進んでこう申し上げました。事の本質からして、それ自体すぐれて善なるものは、それが善**である**というただそれだけの理由で、外部に対しても多くの効用（必ずそれをもたらすと約束せぬまでも）を持たずにはいないのであり、そしてまた、それ自体に本来備わっている卓越性に応じて、大きな、種々の恩恵を必然的に社会に施す源泉になる、と。ちょうど道徳において、正直が最良の方策とされ、その利益が価値基準ではないにもかかわらず、世俗的な面で有益であるように、「知性」の効能と呼べるものに関しても、それを有すること自体がまさに一つの実質的な善で（あり、またそれで十分なので）すが、なおその上、その実質はそれから切り離すことのできない影、つまり、その社会的、政治的有用性といったものを持っているのです。以上が私が前回の「講演」で一に取り上げた問題でした。

この問題の一部がまだ残っています。この知性の修養は、（それ自体は大層高尚なことですが）社会的、現実的義務のみならず、「宗教」とも関係しています。教養ある精神はある意味で宗教的だと申せましょう。つまり、そうした精神にはそれ独自の宗教と考えられるものがありますが、それはカトリシズムとは関わりがなく、協力する場合もあれば敵対もするといった関係です。カトリックの国々においては「教会」に対して弁護するかと思えば妨害するし、カトリック圏外の国々においては、カトリック教会に対して公然と戦いを挑んだかと思えば、それと防衛同盟を結んだりするのです。諸々の「学校」や「学園」の歴史、「文学」や「科学」一般の歴史を繙いてご覧になれば、私がこのように申し上げていることが正しいことを証明してくれることと思います。さて、この「連続講演」における私の目的は、「大学」それ自体の役割と活動を確かめ、「大学」の周囲を取り囲んでいる教育、訓練のための様々な機関と「大学」との関係を確かめることですので、これから私が行なおうといているように、「大学」と「宗教」との全般的関係を明らかにしようとしなければ、私の「大学」論は完全なものとは申せないでしょう。

2

「正しい理性」すなわち正しく行使された「理性」は、精神を「カトリック信仰」へと導き、精神にその「信仰」を植えつけ、宗教的思索をめぐらすたびに、信仰の導きに従って行動するよう教えます。けれども、「理性」が世間において現実的な動因とみなされ、人間の本性に内在する歴史的な経過とはっきりした結果を導き出す有効な原理と考えられるならば、まっすぐな満足すべき方向を取ることなど断じてないのです。このような「理性」は終始自らを独立した、至高のものと見なしており、それ以外の権威を一切必要とせず、自ら一つの宗教を樹立するのです。たとえカトリシズムを容認するとしても、このような「理性」が眠りに就くことはありません。それは熱情や道徳心や利己主義と同じように、それ独自の仕方で作用し、発達します。神の恩寵というものは「神学」の用語を用いるならば、それが存在することで本性（ネイチャー）に取って代わるというわけではありませ

んし、本性もまた恩寵と直ちに一体化し、融合してしまうということもありません。本性はそれ自身の道を進むのであって、自らの不完全さと恩寵がそれに及ぼす引力と影響力に比例して、恩寵の辿る道と一致したかと思えば、今度は並行し、交差したかと思えば、分岐したり逆方向へと進んでいったりするのです。そして、私たち人間の本性がもつ他の動因（プリンシプル）について、また、それが発展するときに起こることが、「理性」についてもみられます。周知の通り、狂信的な宗教、無知で迷信的な「宗教」、国政術の「宗教」といったようなものがありまして、これらはそれぞれカトリシズムに似たものを持っていますが、またカトリシズムと矛盾するものも持っています。好戦的な民族の「宗教」もあれば、遊牧民の「宗教」もあります。未開時代の「宗教」があるかと思えば、一方には文明時代の「宗教」があり、練磨された知性の「宗教」、哲学者や学者や紳士の「宗教」があります。これこそが私がお話ししているあの「理性」の「宗教」です。他と切り離してそれ自体を考察してみれば、いかに接近しようとも、それはもちろんカトリシズムとははっきり異なるものです。と申しますのは、カトリシズムは一つの統一体で、妥協とか修正とかを一切認めないからです。しかしながら、これは「理性」の「宗教」というものを抽象的に考察することであって、現実の問題において、個々人に関してこれを考えてみるならば、この哲学的な「宗教」がカトリックの国にあっては善かれ悪しかれ（あるいはその両方かもしれませんが）、ある程度まで人々に影響を及ぼす精神として存在していることを容易に理解できます。この時代精神はまたカトリックの国々の中においてと同様、非カトリックの国においても見出されるでしょうし、より一層大きな勢力と成果とを誇っているかもしれませんが、カトリック社会同様そのような国に存在するといっても、限られた意味合いにおいてなのです。ですから、本日私たちが取り組むべき問題は、（解明することができるならば）「教化の宗教」の輪郭の一部なりとも書き留めて、「神」が「カトリック教会」にて与え給うた原理、教義、規則とそれがいかなる相対的関係にあるかを決定することです。

さてここで、私が「啓示された真理」と言う時、「使徒信経」でいう主な信仰個条や主要な信仰上の問題点のことを指しているわけでないことは言うまでもありません。「信経」と直接抵触するような哲学を詳述しようとすれば、それがカトリシズムの信仰告白と両立するなどと言うことはできなかったでしょう。私の言う哲学は、「教会」内で考察されるにせよ、「教会」外で考えられるにせよ、必ずしも「信経」を認めるわけではありません。カトリックの国では、教育を受けた人は一種の妄信によってカトリックの信仰個条を当然のことと考えています。一方、カトリックでない国では、信条を無視し、それに関連する全問題を社会的及び政治的利益に影響なしとしてただ無視し去るのです。「神」の本性、「神」の人類に対する計らい、「贖罪（しょくざい）の摂理」などに関する「真理」—そのような「真理」を教養ある精神はある時は謙虚に受け入れ、そして承認し、ある時は決して解決することのできない、そしてまた、私たちを道徳的に向上させたり堕落させたりする力を持ち得ない純然たる見解の相違として避けて通ります。ですから、カトリシズムのことを語る時、私は主な

教義の対象の信仰について言っているのではなく、主として司牧的な教えや道徳的義務といった一つの制度として考えているのです。そして私は、カトリックの教義を主として良心や振る舞いの指導に役立つものとして扱わねばなりません。私は、たとえばカトリシズムが人間の滅びの状態について教えるものとしてお話します。人間が自分で何をなし得るにしても、それによって「天国」へと至ることは全く不可能だということ、人間は自分一人取り残されると魂を失ってしまうという道徳的必然性、「創造主」の御前で被造物にはすべての権利も権利を要求することも全くあり得ないということ、被造物の奉仕を求める「創造主」の果てしない要求、良心の声の命令調の、強制的な力、そして想像を絶する肉欲の邪悪について語ります。私が言っているのは、何びとも「神」の無償の恩寵によって以外、あるいは本性の再生なしに「天国」に到達することがないことをカトリシズムは教えているのだということです。何びとも信仰なくしては「神」を喜ばすことなどないということ、心が罪と従順の双方を宿す場所だということ、愛が神の「法」の成就だということ、「カトリック教会」の一員となることが救いへと至る通常の手段だということです。これらのことがカトリシズムを人々を惹きつける宗教として際立たせる教えであり、また練磨された知性が事実上目を向けさせられる問題です—そこで、私は一方で「哲学」の、そして他方では「カトリシズム」の、教義上のではなく、道徳的及び社会的教えを比較・対照せねばなりません。

3

さて、この問題を開始して私たちが直ちに気づくのは、哲学者が「教会」の司祭たちに授けそうに思われる極めて重要な恩恵のことです。人間の回心や人間性の刷新を聖職者がもたらす第一歩は、感覚へのあの恐ろしい服従（それが人間の通常の状態です）から人間を救い出すことであるのは明白です。その隷属状態の網の目を突き破り、がんじがらめになった心を解きほぐし解き放つことが、心を「天国」へ半ば導くことであると申してもよかろうかと思います。ここで、現象に従った言い方をすれば、神の恩寵でさえもこの巨大な魅力を前にすれば通常は当惑し、為すすべもなく引き下がります。宗教は余りにも高尚にすぎ、浮世離れし過ぎて、私たちに絶え間なく影響を及ぼし続けることができないようです。魂を鼓舞しようとする宗教の努力、そしてそれに協力しようとする魂の努力は激し過ぎて長続きしません。それは腕をいっぱいに差し出したり、何か非常に重いものを支えたりすることと同じで、しばらくの間でしたら何とかなりますが、やがて私たちは疲れきって屈服してしまいます。何ものもそれ自身の本性以上のことを行なうことはできません。そうした時に私たちは超自然的なものに惹きつけられますし、こうした尋常ならざる助けが「天国」から与えられ、それに従うことも可能ですが、しかしそのような助けでさえそれに従うとなると並外れて困難なことなのです。私たちは自然の引力によって易々と確実に大地へと刻々引き寄せられており、上にあがろうとすれば突発的な衝動によって、そしていわば強引に跳びあがってみる以外にありませ

ん。なるほど、宗教は啓発し、脅かし、心服させます。宗教は信仰を与え、良心の呵責を課し、決意を促し、涙を誘い、献身的な愛を燃え立たせますが、それは一時的なものにすぎません。繰り返し申しますが、宗教はこれ以上のものをもたらすべき内的な力を授けるのです。私は、その助けが真に十分であることを忘れているわけでも、そのような助けが得られなかった人々に対する責任を忘れているわけでもありません。私は決して神学的な問題を論じているのではなく、目の前に横たわっている諸々の現象を眺めているのであって、実際問題として、こう申し上げているのです。罪深い精神は悔い改め、二度と再び罪を犯さないと誓い、しばらくは嫌悪の情と憎悪とによって敵の悪意から守られているのです、と。しかし、その敵はそのような悔い改めの時期には常に終わりが来ることを知り抜いています。その敵は本性が反抗の努力をしながら衰えていくまで辛抱強く待ち、次の誘惑の機会を待っておとなしく希望のないまま横たわっているのです。そこで私たちが必要としているのは、少なくとも私たちの魂の敵が近づくのを妨害したり食い止めたりするような、何らかの手段とか道具のようなもので、私たちの本性に十分合致し、それにふさわしいもの、感覚的喜びの誘因と同じように私たちをしっかり捉えて離さないものです。本性をして本性に逆らって行使するのが知恵というものです。ですから、悲嘆や病い、そして苦労といったものが、私たちの内的混乱に対する神意の敵対者となるのです。それらのものは歳月の流れると共にやって来て、通例、当然の帰結として私たちに影響を及ぼすのです（程度に応じて）。しかしながら、これらのものは神の道具であって、私たち人間のものではありません。私たちにはこれと似た、私たちが自分のものとすることができるような救済策が必要です。何か正当な能力の対象となるもの、あるいは何らかの自然な愛情の目的が必要なのですが、それは精神に安らぎ、そこに安やかに宿り、精神を没頭させることができるので、その結果、官能性という、付きまとって離れない力に匹敵するもの、病気に対する同種療法の薬物のようなものになるのです。したがって、ここに、熱情や我意の犠牲を救うに際して知性の練磨が供する重要な助けがあると申せましょう。それは宗教的な動機を与えるものではありませんし、何らの超自然的なものの原因でもなく、その固有の先行現象でもありません。天国からの助けや報いを受けるに値するというわけではありませんが、しかしその真の、本質的な性質がどうであれ、一つの働きを、少なくとも（神学者たちが言うように）**実体上の**善をなすのです。それは知性を刺激するものを持ち込むことによって、感覚の刺激物を駆逐するのです。

ですから、これが「知識」を追求することの**自明の**利益なのです。「知識」を追求することは、精神をそれに害を及ぼすものから引き離し、理性的存在にふさわしい問題に目を向けさせることです。そして、それは確かに精神を本性を超えた地点に引き上げるとか、私たちをして「造物主」を喜ばせる傾向を持っているわけではありませんが、にもかかわらず、それ自体として無害なものを（控えめに言って）言い表し得ないほど危険なものと取り換えることが果たして何でもないことと言えるでしょうか？紛れもなく罪深い思想体系を明らかにそうではない他のものと交換することが

つまらないことでしょうか？皆さんはおそらく「使徒」の言葉を借りておっしゃるでしょう。「知識は人を高ぶらせる」〔「コリントの信徒への手紙１」８・１〕と。そして、疑いの余地なく、この精神の陶冶は私が振り向けている目的に成功した時でさえも、最初から官能性の代わりに自尊心（プライド）を置き換えたにすぎなかったのかもしれません。私はそのことを認めますし、この点についてここで一言しておきたいと思います。これは必然的な結果ではないのだ、と。それは付随的な悪に他ならないのであって、具体的な形にすることもできれば、避けることもできる危険です。ところが、精神がいかなる訓練も法則もなしに野放しにされ、好き勝手なことを考えるようになると、私たちは大抵それを罪、憎むべき罪と断言するでしょう。また確かに、大罪から魂を背けることは、そこからいかなるものが生じようとも、そこまでは一つの善であり、利益であるのです。したがって、まさかの時の友こそ真の友であるとしたら、知性の営みとは、本来崇高で無垢な対象に精神を専念させることに外なりませんが、私たちの尊敬と感謝を特に受けて然るべきものと私は考えます。

4

次のようなことだけでもありません。「知識」つまり知識を獲得する訓練並びに知識が形成する趣味といったものには、精神を磨き、度を越した悪や極悪非道に当然、真に向かわない、いや、それどころか、それを嫌悪し憎悪する生来の傾向がありますが、こうした度を過ごした悪や非道は、悪徳や犯罪に対して終始闘い続けることを怠った人たちが結局しばしば陥ってしまうものなのです。ちょうど滋養が足りているか病弱な体質かによって、食物に関する繊細さややかましい好みが生まれるように、「知識」は精神に、ある種の潔癖さを生み出すのです。そして、この潔癖さは何も高潔な原理を説くわけでも、激しい誘惑にさらされた時に身を護ってくれるわけでもなく、その効き目も定かではありませんが、教養のない人々ばかりか、現に宗教心を抱いている人々までもがそそのかされ、欺かれることさえある、ある種の罪に対して、断固たる嫌悪の情を惹き起こしたり、それを非紳士的であるとして忌み嫌い、蔑み拒絶するくらいの力は大抵持っているものです。広い世間に投げ出されたり、世間の目や世論という抑制の届かない大勢の人々に関しては、このような然るべき保護手段の価値をいくら誇張しても誇張しすぎるということはほとんどありません。このような保護手段が存在するところではほとんどの場合、異なる立場に置かれた人々には馴染みの罪も心に浮かびさえしないでしょうし、その他の場合も、罪に直面した時の羞恥心と発覚を直ちに感知する能力とが罪に対する障害として十分に働いてくれるでしょう。ですから、私がお話しております潔癖さは、世間一般によく見られる、魂の周囲に積み上げられた悪の耐えざる燃料ともいうべき、つまらない会話をただひたすら憎むようになるでしょう。その上、この潔癖さは不正を行なうことを躊躇（ためら）い、その優柔不断が危険が過ぎ去るまで**障害物**の役割を果たすのです。繰り返しますが、それは、心を改めてくれることもないし、偽装した悪の支配から身を護る（心は一種独特の仕方で近

づいてきて、他を打ち負かしてしまう悪を寄せ付けません）ということもありませんが、しかし罪を犯した後はあの独特の道徳的混乱を癒やし、その後二度とそれが近寄らないようにさえしてしまう、激しい自責の念と猛烈な自己嫌悪とを惹き起こす場合もあろうかと思われます。ちょうど小高い丘の頂きから自分が失くした土地を眺め、その後守銭奴に成り下がり、死ぬまで守銭奴のままでいたというあの物語の放蕩者のように。〔ジョン・フォスター『書簡体随筆集』(1811年)、120-22ページ〕

そしてこうしたことはすべて、私たちのような年配になりますと、ある特別な意味で当てはまるようになります。この歳になりますと、心身の苦労はこれまで同様絶えることはありませんが、他の時期には持っていた、悪、刑罰を受けるべき悪に逆らう力が消え失せてしまうのです。粗野な、半ば野蛮な時代には、少なくとも私たちのと同じような風土においては、感覚がいやしくも感情を伝える限り、不快な感情を精神に伝えることが感覚の日々の、否、主要な務めです。風雨に晒されること、社会の混乱や無法状態、権力者の横暴、敵の侵略などは、絶え間なく厳しい苦行を課する怠惰と官能性に対する仮借なき懲罰なのです。粗末な食事、乏しい衣類、激しい運動、放浪生活、軍隊の束縛、不十分な薬物類といったものは、今日では社会の特定の階級に限られた試練となっていますが、かつては多かれ少なかれ人類全員の運命でした。中世の奥深い森や人里離れた荒野では、宗教心や迷信が自ずから人々の間に存在しましたし、人々はそれを気高く簡潔な風習の中に保存するために、様々な方法で宣教師や司祭と協力しました。しかし、社会が進歩するにつれて、人々は町に集まり、狭い空間内で人口が増え、法律が彼らを保護し、芸術が慰めを与え、優れた政治が彼らから勇気と男らしさを奪い去り、生活の単調さから自分自身を頼りにせざるを得なくなると、彼らが悪からの逃げ道ないしは保護といったものを何ら持っていないこと、悪徳とは不健全な苦役の反動にすぎないこと、そして過剰な官能は無趣味で無学な人間の息抜きであることに誰もが気づきます。このことは、今日多くの都市住民に知的で立派な娯楽を供給する計画にとりわけ余念のない時代の実際的な善行に目を向けてみれば、大変よくわかります。肩(チー)のこ(ブ)らな(な)い読み物、役に立ち、しかもおもしろい知識を集めた図書館、科学の講演、博物館、動物学上の収集、眼を楽しませ気持ちを落ち着かせる建築や庭園、気を紛らせ、教養豊(リベラル)かな観想の中で精神を拡大・高揚させる、ありとあらゆる外界の事物—これらのものは少なくとも道徳悪の襲撃をかわし、個々の魂のみならず社会一般にとっての敵を寄せつけないための賢明に提唱された、それ自体に関する限りは立派な、人間の考え出した手段です。

これらのものが、文明の進歩した時代が（「啓示」同様「「理性」が弾劾する）かの道徳的無秩序と戦いを交える時に用いる道具です。私は何もそのようなものが「宗教」に役立つということを表明するのをためらっていたわけではありません。その上、それらこそ、知性の修養が私たちの特性に、そしてまた「キリスト教」のお手本(タイプ)に及ぼす一連の影響力のうち最も重要なものに他ならないのであって、それが誠実、廉潔、公平、公正、親切、博愛、愛想よさという形をとって現われるの

です。そういう事情ですので、本来美徳の栽培に適した土壌がこのような耕し方（カルチャー）をされた成果、あるいはその成果であるかもしれないもの以上に、人生の様々な関わり合いや諸々の個人的な義務のなかで、見た目に高潔で、美しく、人の心を捉えて離さない人格はないと思われます。もし皆さんがその優しさや調和、寛大さ、他に対する丁重さ、そして自己卑下の点で、かの使徒〔聖パウロ「コリントの信徒への手紙１」13〕が愛の名をもって言い表した理想を実現していると思われる鑑を手に入れて考察しようとお考えならば、よく備え付けられた「哲学」の仕事場（スタジオ）くらい頼りになるものはないでしょうし、そこには（正確さに多少の差はあるでしょうが）教化された時代の社会に散在するその理想の見本が数多く見られます。ここでは、皆さんに、時折出版される現代人その他の様々な「伝記」「遺稿」の類いを繙いていただいて、道徳的素材に恵まれ、なおかつ知性の気質に欠けるところがなければ、私たちの知性が特性に及ぼす作用がいかに著しいかがお分かりいただければ十分です。様々な人のことが私たちの心に浮かんできますが、その人たちは当然私たちの愛と賞賛を呼び起こし、世界もそれ自身の手に成ったもののように彼らを崇拝しかねません。宗教的原理、すなわち信仰は、実際どう見ても消え失せたとしか言うほかありませんし、その働きは確かに崇高で美しくはありますが、間違いなく超自然的とは申せなくなって参りました。「知性」はその当然受けるべきものを得るということ、これが主張されなければなりませんが、そのことはまた、私たちのこの考察が導こうとしている結論のためにも主張されねばなりません。この精神の洗練が正真正銘の宗教から表面的には関係がありそうに見えながら、実際は根本的に異なるということ、このことが極めて重要な点なのでして、その点を私の目下の議論は話題にしています。ところが一方、このような精神の洗練というものは、性急で冷ややかな観察者とか何か特定の見方でそれを眺める人々によって即座に「キリスト教」に起源を発するものとされかねません。そして、このような事情ですので、その特徴を続けて詳述する前に、皆さんに、この精神の洗練が基づいている根本原理を明確に指摘することが賢明であろうかと考えます。

5

さて、皆さん、陶冶された精神がある種の悪徳に対して覚える蔑みと憎悪について、そしてまた精神がついうっかりとそのような悪徳に幾分なりとも染まってしまうようなことがあれば、その精神に襲いかかるであろう徹底的な嫌悪と深い屈辱とについて、先程私がお話したのを覚えておいでしょう。ところで、この感情は信仰と愛に基づいているかもしれませんし、そうではないかもしれません。それ自体について考えてみれば、そこには真に宗教的といれるものは何もありません。なるほど良心は生来心の中に植え付けられていますが、それは恥辱とともに恐怖の念をももたらします。精神が他の何ものでもなく精神そのものにただひたすら怒りを覚えると、確かに本性の声が訴えかける真の意義とその暗示の深い意味合いは忘れ去られて、誤った哲学が「神」へと導かれる

べき感情を誤解してしまうのです。恐怖は法の侵犯を、法は立法者や裁判官を言外にほのめかしますが、修養された知性が陥りがちな傾向は、恐怖を自責の中にのみ込んでしまうことであり,自責の念は私たちがまさしく似つかわしく、ふさわしいと感じるものに向けられ、それに限定されてしまいます。恐怖は私たちを自分の外へと運んでいきますが、一方恥辱は私たちの思考の範囲内でのみ作用します。このようなことが教化された時代を待ち受けている危険である、と私は申し上げたいのです。このようなことがその時代が陥りやすい罪（とはいえ、それは避けられない罪では断じてありません。さもないと、私たちは「神」ご自身の贈り物の効用を放棄せねばなりません）ですが、それでもそれは「知性」が通常陥りがちな罪であることに変わりありません。良心はいわゆる道義心と呼ばれるものになりがちですし、義務の命令は一種の趣味に、罪は「神」に対してではなく、人間性に対する犯罪となるのです。

この擬似宗教の好ましからざる見本は、わが国でもしばしば見られます。私は心をこめて詩人の次の言葉を口にすることができます。

> 「英国（イングランド）よ、幾多の過ちにもかかわらず、我、汝を愛す。」〔ウィリアム・クーパー『仕事』（1785年）２・206〕

しかし、これらの過ちに対してカトリックたる者は決して眼をつぶることはできません。この国には多くの美徳を持ちながら、尊大で、はにかみ屋で、気難しく、よそよそしい人間が多くいます。どうしてでしょうか？それは、彼が自分たちの宗教には実は少しも客観的なところがないかのように考え、そして行動するからです。それは、良心とは彼らにとっては立法者の言葉ではなく（本当はそうでなくてはならないのですが)、自分自身の心の命令以外の何ものでもないからです。それは、彼らが自分の外に目を向けないから、つまり、自分自身の精神を通して、その向こうに「造物主」を見るということをせず、自分たち自身と自らの尊厳と一貫性とに当然与えられるべきものと考えていることに夢中になっているからです。彼らの良心は単なる自尊心になり下がってしまっているのです。神を信じ、神に服従して、一つのことを為し、しかる後に次に取り掛かるということをせず(本当はそうすべきところなのですが)、行為と行為との**調和**とでもいうべきものに無頓着で、一つ一つの行ないを一つの統一体にまとめ上げよという、命令をお授けになる「神」を等閑にしている彼らのただ一つの目的は、自分では気づかずとも、表面を滑らかに完全に塗りたてて、自分は義務を果たしたと自分自身に言い聞かせることができることです。過ちを犯すと、彼らは「神」がその対象である痛悔ではなく、自責と堕落の念を覚えるのです。彼らは自らを愚か者と呼ぶことはあっても、罪人と呼ぶことはありません。怒りっぽく気短で、謙遜ということを知りません。彼らは自分の殻に閉じこもっているのです。自らの感情に思いをめぐらし、それを口にすることは、彼

らには苦痛です。他人が自分を見ていると考えることは苦痛ですし、彼らの内気と感じやすさが病的になることもしばしばです。告白に関して言えば、カトリック信者にはきわめて自然なことが、彼らには不可能なのです。確かに、彼らが罪を犯した場合、彼ら自身の性格のために謝罪すべきであったり、彼らが謝罪を求められたり、振り返ってみて謝罪が納得いくものでなければ、告白など不可能です。彼らは強烈な自己省察の犠牲なのです。

しかしながら、この道徳の病には私が描いてきたよりもはるかに魅力的で興味深い形態があります。知性の修養が高慢な性質の人に及ぼす影響について、私はすでにお話いたしました。この知性の修養は、宗教の信仰とはほとんど似通ったところはありませんが、愛想よく飾りのない精神においては大いに引き立って見えるでしょう。皆さん、注意して下さい。私がお話している異端（そう呼んでよろしいかと思います）とは、言葉の真の意味における良心を道徳観とか道徳的嗜好で置き換えることだということに。さて、この誤りは私が述べてきた人物たちをずっと引き立たせてきたもので、遥かに融通の利く、優雅な性格を形成する基礎ともなりかねないものです。この種の誤りはとりわけ、想像力豊かな詩人肌の人々に見受けられますが、その人たちは徳とは行為の優雅さに他ならないなどという考えを躊躇なく受け入れるでしょう。そのような人たちは宗教的及び道徳的真理を理解する際、主義として恐怖というものに到底我慢がならず、それを直ちに単なる憂鬱とか迷信と考えるのです。それよりはまだしも、哲学者の宗教、つまり、紳士の宗教が自由（リベラル）で寛大です。それは体面に基づいています。悪徳が悪である理由は、それが卑劣で、卑しむべく、唾棄すべきものであるからです。これはまさに古代の異教徒がキリスト教と争った時の言い分でした。曰く、キリスト教は精神を美しく愉快なものにただじっと注ぐということをせず、そこに他の何か悲しくも痛ましい観念を混ぜ合わせた。曰く、喜びよりも前に涙を、王冠よりも前に十字架を語った。曰く、罪の償いに英雄的行為（ヒロイズム）の基礎を置いた。曰く、「煉獄」や「地獄」の話で魂を震撼させた。曰く、彼ら異教徒にとっては卑しく卑屈で臆病でしかない「神」に対する考え方とその「神」を崇拝すべきことを主張した、と。「完全無欠にして、偏在する神」という考え―「神」からみれば私たち人間は微塵（アトム）にも満たぬ存在であり、「神」は私たちのもとを訪れ給うとはいえ、恵みをたれ給うだけでなく罰することもできるとする考え方―を彼ら古代の異教徒は忌み嫌ったのです。彼らは自らの精神を聖域とし、自らの思想を神託としたのでして、道徳上の良心は芸術における才能、哲学における叡智に相当するものでしかなかったのです。

6

この問題に関してお話できる余裕があれば、私はこの知性の宗教を、かの皇帝ユリアヌス、「キリスト教的真理」の背教者にして、キリスト教教育の敵の物語によって例証するのですが。あらゆるカトリック信者が未来の「反キリスト」の影を見るこの人物は、哲学的美徳の鑑（かがみ）といってもい

い人でした。性格上の弱点を、単なる詩的基準においてさえも、彼が持っていたのは事実です。しかし、全体として考えてみれば、私は彼の中に道徳的振る舞いの眼を欺く美しさと気高さを認めぬわけにはいきませんし、その美しさと気高さはファブリキウスやレグルスの粗野な偉大さとプリニウスやアントニウスのたしなみとを併せ持っています。ユリアヌスの飾りのない態度、つましさ、質素な生活、官能的快楽など歯牙にもかけないといった類をみない侮蔑の念、戦での勇壮ぶり、執務への専念、文学的精励、慎み深さ、たしなみといったものは、私が見る限り、彼をかつて地上に現われた異教的美徳の最も卓越した見本にするのに役立っています。(原注1)　けれども、その美徳も結局のところ、「裁き主」たる「神」の面前へと突然召還されて審判を受ける時、なんと浅薄で、無味乾燥で、好ましからぬものになってしまうことでしょう。彼の死際は歴史上**類のない**一節となっていますが、その理由は私たち人間存在の苛酷な現実のもとにおける哲学の無力を例証すると同時に、それが一人の目撃者の証言に基づいて報告されているという点にあります。その文学的趣味とキリスト教に対する憎しみとの双方から彼の賞賛者となるにいかにもふさわしい一作家〔エドワード・ギボンを指す〕の言葉を借りていえば、彼ユリアヌスはこう語ったのです。「友よ、戦友よ、わが旅立ちにふさわしい時がついに来た。私は覚悟のできた債務者のようによろこんで自然の要求するものを返済する。…私は罪を犯すことなく生きてきたが、今また後悔の念など抱くことなく死んでいく。私はわが私生活の潔白を顧みて満足している。かの至高の権威、かの神なる『力』の流出が、わが手に純粋にして、無傷なまま残っていたと確信をもって断言することができる。…いま私は感謝の辞を『永遠なる存在』に捧げる。神は暴君の残忍さによって、陰謀の隠された短剣によって、はたまた長患いのゆっくりとした拷問によって、私を苦しませ滅ぼすことをしなかった。神は光栄ある生涯の真っ盛りに、私にこの世からの輝かしい、名誉ある旅立ちをお与え下さり、そして私はといえば運命の一撃を嘆願したり辞退することは、等しく馬鹿げたことであり、卑しいことだと考える。…」

「彼〔ユリアヌス〕は枕元の侍者たちが哀しみにくれ過ぎるのを咎め、やがて『天国』や星星と一体となる君主の運命を女々しい涙で辱めることのないよう厳命した。侍者たちは口をつぐみ、ユリアヌスは哲学者のプリスクスやマクシムスと霊魂の本質について形而上学的議論を始めた。彼が傾けた肉体的及び精神的な努力がまちがいなくその死を早めた。傷口からすさまじい勢いで血が流れ始めた。呼吸は血管の膨張によって妨げられた。彼は冷たい水を一口求めた。そしてそれを飲み終えるか終わらぬうちに、真夜中近く苦しむことなく息を引き取った。」(原注2)　皆さん、これが「理性の宗教」の究極の姿です。良心を感じないその無頓着さ加減、罪の観念そのものを知らない無知、自らの道徳的一貫性をじっと見つめる観想、恐怖の全くの欠如、曇りのない自信、沈着冷静、冷ややかな自己満足といったもののなかに、私たちは「哲学者」の真骨頂を認めます。

7

ギボンは神不在の主知主義の感情に従って、自らの考える道徳的卓越の一つの歴史的実現と思われるものを楽しそうに描いています。シャフツベリー卿は「人間、風習、見解、意見の諸特徴」と題した名高い「論文」集で、すでにその理念を理論的な形で書き著していました。この論集は、皆さんが、この作品からの引用をお許し下されば、私たちの前に置かれた問題のもう一つの例証となるでしょう。

彼の第一の攻撃は、報酬と処罰の教義に向けられています。あたかもその教義が、徳の美しさの真の理解、そしてそれが追及さるべき魂の寛大さや高潔さと矛盾するある考えを宗教に導入するかのように。彼は言います。「人間は正直と徳本来の利益を証明することで満足したためしがない。むしろ、それとは別の根拠をよりよく唱えんがためと思って、これらの利益を軽んじてしまったのだ。徳を報酬目当てのものにしてしまい、その報酬について語り過ぎたので、徳のなかに報酬に値するどんなものがあるのか、結局ほとんど分からなくなっている。なんとなれば、ただ**賄賂をもらう**だけのこと、あるいは**脅かされて**正直な行ないをするということは、真の正直、価値あることにはならないからである。」〔「論文二「常識―機知とユーモアの自由について」〕別の個所では、思い切って言えないことを遠回しにほのめかしながらこう述べています。「もしただ単に報酬だけを期待して、あるいは処罰を恐れて、人が自分が嫌っている善行をしようという気になったり、状況が異なっていればまんざら嫌いでもない悪事を働くことを我慢しているとしたら、この場合いかなる徳も美点もありはしない。このように改心させられた人間に、もはや清廉も敬虔も尊厳もないのは、鎖にしっかりとつながれた虎に柔和さや優しさがなく、鞭によって躾けられた猿に無邪気さや落ち着きがないのと同じである。…願望が達成されず、嗜好を丹精して練り上げるということがなく、畏怖(おそれ)だけが幅を効かせ、服従を強いる時、服従は奴隷的で、それを通して為されたことはおしなべて卑屈でしかない。」〔「論文四「徳と功徳に関する研究〕つまり、彼が言っているのは、キリスト教は善を愛するからではなくて、「神」への畏れによって精神に影響を及ぼしているからこそ道徳的特性の敵なのだということです。

ですから、希望と恐怖という動機を（控えめに言って）背景へと遠く押しやり、ただ単に、あるいは主に徳それ自体に対する愛から生じるものを除いて道徳的に善いものが何もないとしたら、この徳が有する愛を呼び起こす性質がその美となり、一方、やましさはせいぜい調子はずれの楽器が私たちの身をすくませる感情のようなものにすぎなくなってしまいます。彼はこう言っています。「ある者はただ単に生まれつき、ある者は熟練と稽古によって、音楽のわかる耳を持ち、絵画のわかる目を持ち、装飾とか優美さという点では平凡なものに対して鑑識眼を持ち、あらゆる種類の釣合いについての判断力を持ち、そして世の才気煥発な人士の慰みであり、愉しみとなっているこれ

らのほとんどの問題について全般的な趣味のよさを持った大家である。このような紳士たちに気の済むまで無茶をやらせ、ふしだらな素行を許せば、彼らは同時に自分たちの**無定見**を発見するにちがいなく、自らと**相争い**、自分が最高の愉楽と慰みの基礎を置くあの原則に**矛盾**して生きねばならない。学芸に関心を持ち、その知識を持った人たちが追求し、詩人たちが褒め称え、音楽家たちが謳い上げ、建築家やいかなる種類のものであれ芸術家たちが描き作り上げる他のすべての美のうち、最も愉しみを与え、最も人を惹きつけ、最も感動的なものは、実生活から、そしてほとばしる情感から引き出されるものである。それ自体から純粋に湧き起こり、それ自体かの性質を帯びたものほど、心を打つものはない。たとえば、それは美しい情緒であり、優雅な振る舞いであり、人間の気質であり、人の精神の**釣合い**や**特徴**である。この哲学の教えを一篇のロマンス、詩、戯曲でさえ我々に教えることができる。…詩人とか調和を体現している人物に、できるというのなら、この本性の力を否定させてみなさい、さもなくば、この**道徳的魔術**に逆らわせなさい。…人間誰しも高低の差はあれ、ヴァーチュオーソなのであり、誰しもが何らかの優美さを追求するのである。諸事の**美しさ**、**道義**、**端正さ**は力で押し進むであろう。…世界中で最も自然な美しさは正直さと道徳的な真実である。何故なら、あらゆる美は真実だからである。」〔論文二〕

したがって、徳が唯一の美であるとしたら、何が有徳のものかを決める原則は、良心ではなくて**趣味**ということになってしまいます。シャフツベリー卿はこう述べています。「ひとたびそれ自体で明白この上ないことを確信することができたら、つまり、諸事の真の本質にはそれを特徴づける諸々の内面的な特質に関しても、必然的に外面的な個性とか態度とか行動と同様、正しい**趣味**、誤った**趣味**の根拠があるにちがいないということを確信できたら、我々はこれらの問題の後者よりも前者に無知で、判断を誤ることをずっと恥じるべきである。…教養と礼儀を身につけた人の持つ品性に憧れる者は、完璧な申し分のない手本に従って、諸々の人文学および自然科学に対する判断力を慎重に鍛え上げる。…華美で、あくどく、趣味の悪い、ありとあらゆるものから目を逸らすよう特に注意する。そして彼はまた最も優れた作風の正真正銘の美しい調べを持ったもの以外にも、あらゆる種類の音楽から耳を逸らさぬよう少なからず注意している。**生活と風習の正しい趣味**をも同様に顧慮することが望ましい。…教養とか人間性というものが一つの趣味であり、残忍性とか横柄とかふしだらといったものが同様に一つの趣味であるとすれば、…他の諸々の人文学や自然科学に対する趣味とか判断力に関連したもののみならず、この点においても本性を促し育てるよう努めないものがあろうか？」〔論文三「独白、あるいは一作家への忠告〕

時折、彼はこの趣味を道義とか良心とはっきりと対比し、それらよりも趣味を選びます。彼はこう言っています。「結局人を左右するのは、**我々が道義と呼ぶものだけでなく**、**趣味**でもある。人は確かに『これは正しい』とか『あれは間違っている』と考えるかもしれぬし、『これは善いこと』『あれは罪』、『これは人が罰すべきこと』『あれは神が罰すべきこと』などと考えるかもしれない。

ところが、もし諸事に興趣を添えるものが正直と相容れず、嗜好が派手で、好みが低級な美や俗世の均整や釣合いのなかで下位のものに向かうようなら、行為は間違いなく後者の道へと進んでいくだろう。」〔論文六「様々な考察」〕このように、幾分ヤンセニストのように、彼は上位にある愉楽が絶対確実に勝利を収めるようにし、道義を無視して、私たちがただただ官能的美に勝るある種の美に向けて趣味を鍛え上げ身につけるべきことをほのめかしています。彼はこう付け加えています。「この趣味が誤って確立されると、宗教的規律に帰すべき**良心でさえも**、取るに足らぬものにしか見えなくなってしまうことを、私は危惧するものである。」

そして、ここからこの作家のよく知られた教義が出てきます。すなわち、嘲りは真理の試金石なり〔論文二〕です。何故ならば、真理と徳が美であり、虚偽と悪徳が醜であり、美に触発されるのが感嘆の念であるのに似て、醜さに触発された感情が嘲笑の情であるとすれば、悪徳は何も嘆き悲しむべきことではなく、笑い飛ばすべきことという結果になりましょうから。彼はこう言っています。「醜いものほど嘲笑すべきものは他にないし、端麗で公正なものを除いて、罵りに耐え得るものも何もない。したがって、汚れを知らない正直さにこの武器の使用を許さないのは、世の中で最も耐え難いことである。この武器は自らに切っ先を向けることは決してないが、反対するものことごとくに刃を向けるのである。」〔論文二〕

したがって、ここでもまた「立法者」を匂わせる良心が、私たちの生まれついた本性を超えて何ら拘束力を持たない道徳上の趣味や感情に取って代わられるとすれば、（人生や道徳の規範を私たちが手に入れるとして）私たちの大原則は自分自身をじっと見つめることということになってしまいます。こうして彼は「論文」の一つに「且つ汝以外に何人をも求むるな」という座右銘と共に「独白」という題名をつけ、こう述べています。「野心、貪欲、堕落、そしてすべてのずる賢く、意味ありげな悪徳の主な関心事は、隠れて閑居し、心の深奥へと隠遁したことの帰結たるこのような会談や打ち解けた談話を妨げることである。自分自身と遠く隔たった堅苦しい間柄になり、独白という我々の**証明**方法を回避することは、**迷信とか頑なな信念のみならず**、悪事とか下劣さのこの上ない術策である。…情熱的な愛人は、いかに孤独を気取ってみても、本当に一人ぼっちでいることなど決してできない。同じ理由でそれは、この種の愉しみに耽ることから想像力に富む聖人や神秘家を守る。視野を狭めて自分自身の本性と心を覗き込んで、もはや自分という人間が自分自身にとって謎ではないということを探ってみるかわりに、その人は**他の謎に満ちた事柄の本質をじっと見つめる**ことに没頭するが、決してそれを説明したり理解することはできない。」〔論文三〕

8

これらの文章を私が「哲学の宗教」と呼んでいるものの実例としてお話していますと、次のことがはっきりとお分かりいただけると思います。そこにはある意味で真実でない教義は一つもないの

ですが、他方すべての陳述が完全な真理ではないがために、歪められ、誤っているということです。これらの文章は一面から見て真理を表わしていますが、それ故にこそ不十分なのです。良心は紛れもなく一つの道徳感覚ではありますが、それに止まりません。悪徳もまた一つの醜さですが、それよりもひどいものなのです。シャフツベリー卿は、彼にそのつもりがあれば、ただ単なる恐怖だけでは道徳的回心をもたらすことはできないと主張するかもしれませんが、私たちとしては強いて彼に答える必要もないでしょう。真の回心が、徳というものがよい趣味の一特徴にすぎず、悪徳が俗悪で非紳士的とする教義の結果としてもたらされるということを証明することは彼にとって困難でしょう。

そのような教義は本質的に皮相で、その結果も表面的なものになるでしょう。そこには目に見える美しさと触れることのできる適切さ以上の正・不正の物差しはありません。なるほど良心は激しい痛みを与えはしますが、その痛みはいかにも不合理で、それを畏敬することは教養を欠いた迷信となってしまいます。けれども、もし私たちが心の最も奥深くにあるものを軽んじれば、どちらかといえば表面にあるものに敬意を表する以外何も残らなくなってしまいます。**見かけ**が**実質**になってしまうというわけです。つまり、きれいに見えるものが善いもの、不快感を与えるものは悪いものになるのです。美徳は心地よいものであり、悪徳は苦痛を与えるものということになりましょう。そのような原則をもってして美徳を計るのは、効用によって美徳を評価するのと同じです。このこともまた架空の憂慮ではありません。一人の偉大な賢者が、騎士道精神に対する告別の辞の燃え立つばかりの雄弁のうちに、ふと漏らして世に知らしめてしまった感情を私たちは皆思い起こさなければなりません。バーク氏はこう叫んでいます。「消えてしまったのです。あの道義心と、あの純正な名誉観は。これらは汚点を傷の如くに感じ、残忍性を和らげる一方で勇気を奮い立たせ、その触れるものことごとくを気高くしました。それらのもとにあると**悪徳さえもその粗雑さをことごとく失くして、その邪悪さの半ばを取り除かれたのです。**」〔『フランス革命についての諸考察』〕この美しい文章の最後の一節に教化された時代の倫理的気質の適切すぎるほどの例証があります。それは法律違反の探知であって、道徳的な罪ではありません。私生活は神聖で、それを取り調べることは耐え難いことです。そして良識は美徳なのです。不面目、無作法、あらゆる種類の衝撃、あらゆる種類の嫌悪は、第一級の不快です。飲酒や罵り、惨めな貧困、無思慮、怠惰、杜撰な無秩序といったものが、不道徳の観念を作り上げています。詩人は、どんな邪悪なことも口にできますし、それによって咎められることもありません。天才の作品は、その主義信条が何であれ、危険を冒すことも恥を感じさせることもなく読まれるでしょう。流行、名声、美、英雄的なものは、社会に何らかの悪を押し付ければ十分なのです。宮廷の壮麗さや、良き社会の魅力とか機知とか想像力とか趣味とか育ちのよさといった魅力や、地位の**威光**や、富の力は、悪徳と無宗教を覆い隠す幕であり、その道具であり、言い訳です。そして、こうしてついに私たちは知るのです。その変化は驚くべきも

のかもしれませんが、官能性をはねつけることによって始まる「知性主義」のかの洗練が、その弁護によって終わることを。なるほど「教会」の庇護のもとに、そしてその当然の成長につれて、「哲学」は道徳の大義に尽くすものですが、しかしそれがそれ自体の意志を持つほどに強力で、それ自体の重要性という観念によって高められ、一つの理論を築き上げようとし、一つの原理を打ち立てようとし、一つの倫理体系の完成を目指そうとし、人類の道徳教育を企てると、哲学は最初本能的に反対していると思われていた悪をけしかけてしかいなくなってしまうのです。真の「宗教」はゆっくりと成長し、一旦植え付けると、取り除くことは困難です。しかし知性が作り上げるその偽物はそれ自身のうちに根を持っておらず、突然芽を出したかと思うと、突然枯れてしまいます。それは本性に訴えかけ、古いアダム〔罪深い本性〕の支配を受けるのです。そういうわけで、退位させられた君主たちのように、その知性の宗教は、真の権力を失うと、もったいぶり、威厳を保とうとするのです。醜さをそれは忌み嫌います。したがって、それは人が悪徳に陥るのを思いとどまらせることはできないので、歪んで醜くなるのを見るのを避けるために悪徳を飾り立てるのです。それは突き止めることも癒やすこともできない「悪性の腫れ物を薄皮で包むが」

「烈しい病毒が目には見えぬが、奥深く入り込んでいく」〔シェイクスピア『ハムレット』3・4・147-49、福田恆存訳〕

のです。

そして、この哲学的「宗教」の浅薄さ加減から、その信奉者たちがキリスト教徒自身よりもキリスト教のある種の教えをより容易く正確に実現できそうに思われるということが起こってくるのです。聖パウロは、すでに申し上げたように、福音の完徳（パーフェクション）の模範を私たちに示しています。彼はキリスト教の特性を最も優美な形と、最も美しい色合いのうちに描き出しているのです。彼は忍耐強くしかも柔和な、謙虚にして誠実な、私心なく、満ち足りて、辛抱強い、かのキリスト教的愛について語っています。彼は一人ひとりが自分よりも他者を優先すべきことを、互いに道を譲り合うべきことを、無礼な言葉遣いや悪口を慎むべきことを、自惚れを避けるべきことを、穏やかに落ち着いているべきことを、朗らかで幸福であるべきことを、あらゆる人との平和、真理と正義、礼儀と優しさ、慎ましく好ましく高潔で評判のよいあらゆるものを守るべきことを、教えています。以上が外部との関係においてキリスト教徒がとるべき態度について、聖パウロが示す手本です。そして、繰り返し申しますと、世間という学校はこの卓越性の典型の生き写しを、「教会」よりも遥かに見事に送り出していると思われます。今日、「紳士」はキリスト教が生み出したものというより、教化の産物になっています。その理由は明々白々です。世の中はものごとの表面を正すことで満足していますが、「教会」は心の奥底を再生することを目指すからです。「教会」は常に変わらず最初か

ら始めるのでして、多くのその子らに関しては、決してその初歩の段階を超えることができずに、絶えず基礎固めに従事しているのです。「教会」は本質に携わっているのですが、この本質的なものこそ装飾的で魅力的なものに先立ち、それらのものを導き出すのです。「教会」は人間の大罪を癒やし、それから人間を遠ざけているのです。「正義と節制と来たるべき審判について話し」〔「使徒言行録」24・25〕ているのです。信仰と希望、献身と誠実さと愛の原理を主張します。「教会」は教訓に深く関わっていますので、完徳とか完徳の勧めは「天」来の神霊（インスピレーション）にほとんど任せっきりです。「教会」は望ましいものよりも、むしろ必要なものを目指します。「教会」は少数のためのみならず、多数の味方でもあるのです。「教会」は魂に救いが得られるように取り計らいますので、神からのお召しがあった場合、魂は雄々しさを願い、美の萌芽のみならず美の完全な釣合いを達成することができる状態にあるのだと言えましょう。

9

以上が「教会」の方法、ないしは（言ってみれば）政策です。一方、「哲学」は非常に異なった観点からこの問題を眺めます。「哲学者」たちは審判の怖れとか魂の救済をどのように取り扱うのでしょうか？シャフツベリー卿は前者を一種「狂おしいほどの恐怖」と呼んでいます。後者については「魂の救済がいまや高揚した精神の英雄的情熱となる」〔論文一「狂信に関する手紙」〕と冷笑的に不満を漏らしています。もちろん自らの主義に従って、自分の欲するものをキリスト教から選び取るのは彼の勝手です。彼は神学的、神秘的、霊的なものを捨て去り、道徳的、審美的に美しいものを選り抜くのです。彼にとっては、結論とすべき所から教え始めていることなど全く問題ではありません。言ってみれば、樹木を植える代わりに宴のために花を摘み取っているだけなのですが、そんなことなど全く問題ではないというわけです。彼は当面の生活を目指すだけで、彼の哲学は彼と一緒に死んでいくのです。花が祝宴の終わりまでもちさえすれば、それ以上何も求めたりしません。夜が訪れれば、枯れ萎んだ花びらは彼の亡骸と渾然一体となることでしょう。彼も花々もその務めを果たしたので、死んでいくのです。確かに、こういう条件のもとで人を高潔にするには、大した手間暇はかかりません。それはある国語とか芸事でも教えるようなもの、ラテン語の読み方とか楽器の奏し方を教えるようなもので、芸術家の仕事ではありますが、「使徒」の任務とは申せません。

このような外面の飾りつけが哲学的道徳のほとんどはじめにして終わりです。哲学的道徳が謙虚であるよりもむしろ慎ましくあることを目指す理由はここにありますし、それが気取りを捨てたその瞬間に、誇り高くしていられるわけもここにあるのです。実際、謙遜（ヒューミリティ）というものをそれは希求しないのです。謙遜は達成するにしても確かめるにしても、ともに至難の徳の一つです。それは心そのものに至近の所にあって、その試金石は極めて繊細にして精妙である必要があります。謙遜の偽物はたくさんありますが、ここではそれに触れません。何故なら、繰り返しになりますが、そ

れは私たちが検討している倫理基準には、ほとんど名前すら示されていないのですから。しばしば言われてきたように、古代文明にはその観念はなく、それを表わす言葉もありませんでした。というよりもむしろ、謙遜という観念はあったのですが、それは徳ではなく精神の欠陥と考えられており、したがって、それを指す言葉は非難を意味したのです。現代世界に関して言えば、幾分似通った「へりくだり（コンディセンション）」という言葉を誤用してきたために、それが黙認されていることを皆さんはご承知でしょう。謙遜にしろへりくだりにしろ、振る舞い上の徳と考えるならば、他の場合と同じく、頭の中で、私たちより劣った人たちの水準に自らを置くことにあると言ってもいいでしょう。それは自分の特権的な地位を自発的に放棄することにとどまらず、私たちが身をかがめて近づこうとする人たちの境遇を実際に共にし、それを背負い込むことでもあるのです。自分が卑しいもののように感じ、そしてそう振る舞うこと、これこそが真の謙遜であって、低い地位にあるふりをしながら、自惚れているなどは謙遜ではありません。聖パウロが自らを「聖なる者たちすべての中で最もつまらない者」〔「エフェソの信徒への手紙」３・８〕と呼んだ時、彼の謙遜はこのような真実のものでした。また、自らを大罪人と見なした多くの聖者たちの謙遜もそのような本物の謙遜でした。それは、彼ら自身が考える限りでは、彼らの権利と他者が思っている特権とか特典を放棄することです。さて、皆さん、この観念、「へりくだり」という言葉のこの神学的な意味と、この言葉の英語本来の意味とを対比してみると、少なからず教えられます。この二つを並べてみれば、皆さんは世間でいう謙遜と「福音書」の謙遜との間の相違に直ちにお気づきになられるでしょう。世間で「へりくだり」という言葉が使われる時、それは確かに人が身をかがめることを意味しますが、それは前かがみになることであり、人はしっかりと腰をおろした席から一歩たりとも離れようとはしないのです。それは優越者の行為であって、その人は「へりくだり」の姿勢をとっているとはいえ、自分がなお優れていることを、そして自分が理屈の上で自ら身を置いている水準の人々に対して恩恵を施す行いをしているに他ならないことを、自分に言い聞かせているのです。そしてこれが、哲学者が作り上げる自己卑下の徳に最も近い観念です。これ以上のことをするのは彼にしてみれば、卑しい行為もしくは偽善であり、直ちに疑惑と嫌悪とを惹き起こすことになるのです。世間とは常にそういうものなのです。教育を受けた異教徒たちが「教会」の殉教者や証聖者（コンフェッサー）たちに対して抱いていた軽蔑の念を私たちは知っていますが、それを今日の反カトリックの団体は分かち持っているのです。

「哲学」の道徳原理とは、忠実に説明するならば、このようなものです。しかし、今日のように異教徒的ではなく、公然たるキリスト教の時代に敢えて謙遜を決まり文句で咎めだてたり、自尊心（プライド）を自慢することはできません。したがって、「哲学」は事の真相に目をつぶることのできる方便を探すのです。厳粛な自己否定的な属性を有する謙遜を、それは愛することができません。ですが、慎ましさ（モデスティ）以上に美しいもの、より人の心を惹き付けるものがあるでしょうか？実際は根本的に異なるものでありながら、一見したことろ見事なまでに謙遜のふりをする徳とはどんなものでしょう？

実は、慎ましさは、その魅力はなかなかのものですが、数ある徳の中で最も奥深く、最も宗教的だというわけではありません。むしろそれは、闘う魂の前哨部隊ないし歩哨であって、周囲の世界との間に発生する交わりを絶えず監視しているのです。それは五感を巡回して、顔つきにまで現われますし、目や耳の慎みを守り、声や身振りを抑制します。慎ましさの領域は外面的な立ち居振る舞いにあります。ある種の徳が神学的な問題に、あるものが社会に、そしてあるものが精神そのものに関係があるように。そして、他の種々の特性以上に表面的ですので、いとも簡単にそれらから引き離されてしまいます。それはまた本来相容れない原理や特性と結び付けられることを許し、それが与えられた時には付随していなかった感情や目的をしばしば覆い隠します。それが謙遜のなくてはならぬ指針であることはほとんどなく、自尊心と両立しさえするのです。しかし、そのことは「哲学」の目的にはかえって都合がよいのかもしれません。哲学が謙虚であることはできませんので、慎ましさが直ちにその謙遜になるのです。

自尊心は、精神が教育されるに際して空しく浪費されるかわりに、そのような訓練を受けるうちに利用されるようになります。それは自尊心という新しい名前を得て、本来その属性たる不快で、とっつきにくいものでなくなるのです。それは魂を動かす原動力ではありますが、姿を現わすことはほとんどありません。そして姿を現わすとなると、繊細さと優しさの衣裳をまとい、良識と信義を重んじる心がその活動の道を指し示すことになります。それはもはや明確な目的を持たない不安な動因ではなくなり、広大な活動領域をあてがわれ、それが自然、心を砕くであろう社会の利益の促進に寄与するのです。それは勤勉、倹約、誠実、従順といった方向へと導かれ、今日重んじられている宗教とか道徳のまさに必需品になるのです。それは上下卑賤の別なく、貞節の守りとも誠実さの保障ともなります。今日そうであるように、社会における家庭の守り神でありまして、下女には小ぎれいさと礼儀正しさを、主婦には上品な物腰と洗練された優雅な作法を、一家の長には公正さと男らしさと寛大さを鼓吹するのです。それは都会にも田舎にも光を放散し、堂々とした建物と晴れやかな庭園で大地を覆い、畑を耕し、商店に品物を備えそれを美しく飾り立てます。摂理を鼓舞する本源であるかと思えば、一方では気前よく浪費することを奨励する原理でもありますし、高潔なる野心の本源であるかと思えば、高雅な享楽のそれでもあるのです。それが社会の表面に息を吹きかけると、白く塗った墓〔「マタイによる福音書」23・27〕はたちまち見るも美しくなるのです。

この自尊心（セルフリスペクト）は、それを活動させた教化によって磨かれると、白日の下に晒されることを強く恐れる気持ちと、悪評や嘲りに対する鋭い感受性とを精神に吹き込みます。それはいかなる種類の行き過ぎも憎むようになり、いわゆる醜態を嫌い、英雄気取りや見せ掛けや自分勝手、饒舌、つまり、いわゆる冗漫な話しぶりといったものを容赦しません。それは低俗なお追従を嫌悪しますが、それはおべっか使いが満たしてやる欲望の根絶に資するからでは全くなく、欲望を満足させることのばかさ加減を心得ているから、つまり、それによって他人が蒙る迷惑を知っているからです。ですか

ら、お金持ちや権力者に賛辞を呈しなければならない場合、お追従の準備にはかなりの精妙さと技巧が必要とされるのです。こうして、虚栄心(ヴァニティ)は、それが自然にほとばしり出てくるのを阻まれるために、より危険な自惚れへと変わってしまいます。それは人間に、感情を押し殺し、気分を抑制し、判断の厳正さと調子を和らげることを教えます。それは、シャフツベリー卿が望むであろうように、異議を申し立てるべき事柄を非難するにあたって、教育を受けていない人々によく見受けられる方法よりも、より効果的であるのみならず、より洗練され穏やかな手段として、悪戯っぽい機知や風刺をむしろ好むのです。それが決闘という非キリスト教的な風習に穏やかながらも精力的に反対する理由も、悲劇的で大袈裟なものに耐えられないという事情から来るのですが、その決闘に対してそれは、ただ単なる悪趣味、野蛮な時代の遺物という烙印を押すのです。そして確かに、「宗教」が廃止を目指しながらできなかったことを、それは達成しそうなのです。

10

紳士とは決して苦痛を与えない人、というのがほとんどその定義となっている所以は、ここにあります。この説明は厳正でもありますし、それ自体に関する限りは的確でもあります。紳士はもっぱら周囲の人々の自由で自然な行動を妨げる障害物を取り除くことばかりに余念がなく、自分で率先して事に当たるよりも、むしろ周囲の人々の動向に同意するのです。紳士の施す恩恵は、個人が生まれたままの自然な生活にさまざまなものを手配する際、快適なものとか便利なものと呼ばれるものに類似していると考えられるでしょう。ちょうど寒さや疲れを払い除ける役目を果たす安楽椅子とか心地よい炉火のようなものです。もっとも、それらのものがなくても自然は休息や体温を調節する手段を供してくれますが。同様に、真の紳士は共存する人々の心に軋轢(あつれき)や烈しい動揺を惹き起こす一切のこと—意見のぶつかり合いとか感情の衝突、気兼ね、疑惑、憂鬱、憤りといった一切のこと—を注意深く避けます。紳士たるものの大なる関心事は、すべての人を気楽にくつろがせることだからです。彼は自分の仲間全員から目を離さず、はにかみ屋には優しく、よそよそしい人には穏やかに、愚かしい人には慈悲深いのです。心を落ち着けて相手に話すことができます。ふさわしからぬ物言いや人を苛立たせる話題に陥らぬように用心しますし、会話において目立つこともめったにありませんが、かといって決して退屈ではありません。人に恩恵を施す時には、さも大したことではないかのように振る舞いますし、与えている時には受け取っているようにしか見えません。強要されない限り、決して自分のことを語りませんし、単なる報復のために自己弁護をすることは決してありませんし、中傷や噂話を聞く耳を持たず、自分を邪魔する人たちに動機ありとすることをためらい、あらゆることを最善に解釈します。論議をする時は決して卑劣であったり、けちであったりすることなく、不正な利益を決して受け取らず、人格や議論中の激した言葉を誤解したり、口に出す勇気を持たない悪口を遠回しにほのめかすということも決してありません。彼は

賢明なる思慮分別によって、敵に対していつか友となる日がやってくると思って遇せ、という古の賢者〔ラベリウス〕の格言を遵守するのです。彼は良識に恵まれているので侮辱を受けることはなく、ものごとに熱中する質なのでかつて受けた不当な扱いを覚えてなどいられず、痛みを感じない質なので恨みを抱くこともないのです。彼は哲学的な主義主張によって忍耐強く、寛大で、従順です。それが避け難いものであるがゆえに苦痛を甘受しますし、取り返しがつかないがために死別を受け入れますし、それが宿命であるがために死を甘受するのです。もし何らかの論争に乗り出すとすれば、彼の修練された知性が、おそらくは自分よりは優れているかもしれないが教養の低い人々のぎこちない無作法に陥らないように守ってくれます。これら教養に乏しい人々はなまくらな武器と同様、鮮やかに切断するかわりに引き裂き、切り刻み、議論の要点を取り違え、些細な事柄に精力を浪費し、論敵を誤解し、問題を当初よりもややこしくしてしまいます。一方、紳士たるもの、その意見が正しいことも誤まっていることもあるでしょうが、頭脳明晰ですので不正をそのまま許すことはできません。彼は力強いと同時に単純であり、果断であると同時にそっけなくもあります。彼以上の率直さ、思いやり、寛大さはどこにもみられません。彼は相手の立場に身を置き、その誤りの責任を負うのです。彼は人間の理性の力と同時にその弱さをも心得ており、その本分と限界を知っているのです。不信仰者であるとしても、その学殖の深さと度量の大きさのゆえに宗教をあざ笑ったり、それに反対することはなく、その聡明さのゆえに不信心に凝り固まって独断家、狂信家になってしまうなどということはありません。彼は敬虔と献身を重んじますし、自分が賛同しない制度をも崇拝すべき、美しき、有益なるものとして支持しさえするのです。彼は聖職者に敬意を払い、宗教の神秘を非難し糾弾するのではなく、丁重に断われれば満足なのです。彼は宗教的寛容の友ですが、その理由はただ単に彼の哲学がすべての信仰形式を偏らない公平な目でながめることを教えたからというだけではなく、教化の必然的結果たる感情の穏やかさと女々しいともいえる柔弱さにも因るのです。

たとえキリスト教徒でないとしても、彼は独自の方法で、ある信仰を抱いていないわけでもないのです。その場合、彼の宗教は想像力と感情の宗教とでもいうべきものです。それは崇高、荘重、美といった諸観念の具現であり、それなくしてはいかなる大哲学もあり得ないものです。時として彼は「神」の存在を認め、時として未知の原理や特性に完全性という属性を付与します。そしてこうした理性の演繹とか空想力の産物を、彼はこうした卓越した思想の根拠とし、変化に富んだ体系的な教えの出発点としますので、キリスト教そのものの信奉者かとさえ思えるくらいです。その論理的な能力の正確さと着実さそのものによって、彼はいやしくも何らかの宗教的な教義を奉じている人々にどのような感情が一貫しているかが理解できますし、他人の目には彼が神学上の真理を全面的に感じ取り、奉じているかに見えるのですが、それらの真理は彼の心の中では数々の推論の結果以外の何ものでもないのです。

以上が、宗教的信条は別として、練磨された知性が形成する倫理的人格の特徴のうちの幾つかです。それは「教会」の内部にもその外側にも見られますし、聖職者の中にも放蕩者にも見られます。それは浮き世の**理想美**を形づくっていて、カトリック信者の成長を手助けする一方で、歪めてもいるのです。それは聖フランシス・ド・サールやポール枢機卿のような人たちの教育に役立つかもしれませんし、シャフツベリー卿やギボンのような人たちの思想の限界であるかもしれません。バシリウスとユリアヌスはアテネの学園では学友でしたが、一方は「聖人」、「教会博士」となり、他方は「教会」を嘲笑する無慈悲な敵となったのです。

（原注）

1）私は次のジェルディル枢機卿の言葉と矛盾することは一切述べていないつもりである。もっとも、ユリアヌスの性格の好ましい面を拡大しはしたが。「戦についての天性と知識と才能を持ち、軍隊を指揮するにあたっては勇気と無視無欲で臨み、数々の権威ある称号よりもむしろ実践を重んじたが、それらの根本方針、すなわち偽善と表裏一体化した妄信であった虚栄心によって、おおむねは腐敗していた。また、資力の点では豊かな、識見豊かな精神を有しているが、卑小さに傾くことがあり、政治において極めて重大な過失を犯し、また彼の復讐のための犠牲となった無実の人々がいた。自らが捨てたキリスト教に対する毒々しい憎しみ、妖術に対する一種気狂いじみた情熱的な愛着。以上が一般にユリアヌスを描写する際みられる特質であった。」

2）ギボン『ローマ帝国衰亡史』第24章。

本稿はジョン・ヘンリー・ニューマン『大学の理念』（*The Idea of a University*, Oxford: Oxford University Press, [1852] 1976）第八講演「宗教との関係からみた知識」の全訳である。訳注は活字のポイントを落として本文中に入れた。